

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00099

研究課題名(和文)ルネサンス期フィレンツェの政治思想 - 共和国理論とキリスト教の緊張関係

研究課題名(英文)Political Thought in Renaissance Florence: The Tension Between Republican Theory and Christianity

研究代表者

鹿子生 浩輝 (Kakoo, Hiroki)

東北大学・法学研究科・教授

研究者番号：10336042

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、イタリア・ルネサンス期の政治思想の構造的特徴を明確化することであった。特に注目すべきは、マキアヴェッリの政治思想とその政治的背景であり、この研究では次の二点を明確化することができた。第一に、マキアヴェッリとグィッチアルディーニの思想的比較と知的影響関係の把握である。第二に、マキアヴェッリと当時のフィレンツェのキリスト教思想との関連の明確化である。これらの作業によって、いかにマキアヴェッリが世俗性を徹底し、独自の共和国理論を構想したかを浮き彫りにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義は、マキアヴェッリの政治思想、とりわけその共和国理論を当時の歴史的な文脈から明らかにすることによって、イタリア・ルネサンス思想を過度に単純化せず、その複雑な様相を剔抉したところにある。当時、多くの思想家は、来世での救済というキリスト教信仰を抱いていたが、同時にルネサンス期は異教の文化が復活した時代でもある。多くの思想家たちがフィレンツェ共和国という世俗的価値の繁栄を期待しつつも、同時に魂の救済を求めていた。マキアヴェッリはこれらが両立しないことを踏まえつつ、祖国の存続と繁栄のために、キリスト教の教義の中心を放棄したのである。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research was to clarify the structural features of political thought during the Italian Renaissance. The study primarily focused on Niccolò Machiavelli's political philosophy and its political context. As a result, two points were clarified. First, it involved a comparative study of the political thought between Machiavelli and Guicciardini. Second, it elucidated the relationship between Machiavelli's political thought and the Christian ideology prevalent in Florence at that time. Through this analysis, it highlighted how Machiavelli's political philosophy thoroughly emphasized the secular nature of the republic and revealed its rejection of Christianity.

研究分野：西洋政治思想史

キーワード：マキアヴェッリ フィレンツェ

### 1. 研究開始当初の背景

ニコロ・マキアヴェッリはルネサンス期イタリアの政治思想家であり、西洋政治思想史の中で最も影響力のある人物の一人である。申請者は、これまで彼の政治思想をめぐる長年の難問に取り組んできた。その問題とは、彼の主著『君主論』の議論は、もう一つの古典『ディスコルシ』の議論といかに整合的であるのかというものである。申請者は、『ディスコルシ』の内容から明らかのように、マキアヴェッリがフィレンツェの共和政支持者であり、このことは『君主論』の内容と矛盾しないことを明らかにした。

しかし、申請者のこれまでの研究では、マキアヴェッリの思想がいかなる点で独自性を持つのかという問題は、中心的な課題ではなかった。そこで本研究では、彼の同時代人の思想、さらには彼の影響を受けた思想家の理論を把握することで、彼の理論的な偉大さを解明しようと試みた。

同時代の思想家としては次の二人が挙げられる。一人は、マキアヴェッリの思想形成過程において強い影響をもたらした修道士ジローラモ・サヴォナローラである。この人物は、フィレンツェ市民がメディチ家を追放した後、この都市の精神的支柱となり、フィレンツェに民主政を導入するうえで重要な役割を果たした。

もう一人の重要な思想家にはフランチェスコ・グイッチャルディーニがいる。彼は、マキアヴェッリの親友であり、後世には偉大な歴史家として語られることになる。彼もまた、フィレンツェの民主政を適切な政体とみなしていたが、彼は、マキアヴェッリの『ディスコルシ』を十分に意識しつつ、彼とは異なる理論を提唱することになった。

本研究は、主にマキアヴェッリの思想とこれら二人の思想との関係を把握することで、ルネサンスの政治思想が世俗的であるがゆえに、キリスト教といかに関わるかという重要な問題を生じさせているのではないかという想定から始められた。

### 2. 研究の目的

申請者の研究の長期的目標は、イタリア・ルネサンス期の政治思想を構造的に理解し、その特徴を浮き彫りにすることである。この見地から本研究では、二つの異なるタイプの政治的理解に着目し、その理解のあり方を明確化することを目的とした。一つは、マキアヴェッリと同様に世俗的な共和国論を展開したグイッチャルディーニの政治理論である。そもそもグイッチャルディーニは、フィレンツェにはいかなる政治制度を望ましい政体だと考え、いかなる対外政策を望ましいと考えていたのか。さらにグイッチャルディーニは、政治のこうした内外のあり方は、キリスト教とどのような関係にあるのか。これらの点を明らかにすることが本研究の課題の一つであった。

もう一つの検討対象は、ある程度は現世における政治的価値を謳いつつも、究極的にはキリスト教の価値、すなわち、来世での救済という価値に訴える宗教的思想である。この立場は、サヴォナローラとその支持者であるサヴォナローラ派である。サヴォナローラ派は、ごく一部の狂信的な集団だったわけではなく、フィレンツェで幅広く支持されていた政治的党派であった。この政治的背景は十分に留意されるべきである。なぜなら、マキアヴェッリがフィレンツェ市民をいかなる政治的理解を抱いた対象としていたかを明らかにするうえで無視できないからである。

また、問題は、マキアヴェッリがサヴォナローラを受け入れたか否かという単純なものではない。マキアヴェッリは、いったいサヴォナローラの何を支持し、何を拒絶したのか。さらには今後のフィレンツェ政治に取り入れられるべき教訓として何をサヴォナローラの行為から学んだのであろうか。これらの点を明らかにすることが本研究のもう一つの大きな課題であった。

### 3. 研究の方法

本研究の方法は、マキアヴェッリらのテキスト(著作)の内容を、そのコンテクスト(政治的文脈ないし歴史的文脈)を援用することで明確化するものである。これによって現代の関心を直接的に歴史的著作に持ち込み、著者の意図を歪めるといった危険性を極力排除することを試みる。著者の意図が歴史的背景なしには語りえないことは明らかであろう。特にマキアヴェッリのように同時代人の読者に具体的なメッセージを発していることが明白な場合には、当時の歴史を把握する作業は、彼の政治思想を把握するうえで重要である。もちろん、このことは、テキストの精読が不要であることを意味しない。著者の政治的意図を把握するためには、テキストとコンテクストとの対応関係を入念に調べることが重要であり、いかなるコンテクストをも採用できるといわけではないためである。

また、著者の意図を明確化することは、最も重要な作業ではあるが、著者の意図を超えた影響力をも明らかにするために、後世の理論家がどのような政治的文脈でマキアヴェッリの著作を捉えたかという視座をも採り入れた。この方法を取り入れることで、同時代人や後世の思想家たちにマキアヴェッリの議論がどのような影響を与えたかを探ることが容易となり、ひるがえっ

てマキアヴェッリの議論の独自性を浮き彫りにしうるためである。

#### 4. 研究成果

##### (1) ギッチャルディーニとの思想的関係

本研究では、特にマキアヴェッリとギッチャルディーニという知的巨人の政治理論に焦点を合わせ、前者が開拓した新しい政治学的視座に対するギッチャルディーニの知的対応を明確化することを目指した。マキアヴェッリとギッチャルディーニはいずれも、祖国フィレンツェの自由を共和政の枠組みで確保しようとしていた。しかし、そのために彼らが構想した実践の方策は異なっており、その相違は、彼らに異なる理論を構築させた。本研究は、彼らの政治理論の特徴を比較する作業であった。

この作業から明らかになったのは、ギッチャルディーニがマキアヴェッリと同様に、多数者の政治参加という意味での民主政をフィレンツェに導入することを望ましいと考えていたにもかかわらず、元老院のような貴族政的機関を付加する必要性を力説していることである。フィレンツェの政治的慣習がその市民に民主政を適合的にさせているという理解の点では彼の見解はマキアヴェッリと同様であるが、多数者の知識資質、つまり思慮の欠如などの理由により、ギッチャルディーニにとっては、フィレンツェの独立や自由の維持のために、より貴族政的な政体を探らねばならなかったのである。

さらに外交面では、ギッチャルディーニにとっては、マキアヴェッリの古代ローマのモデル、すなわち、支配権を拡大させる共和国モデルは、当時の政治状況を鑑みれば、適切なものではなかった。彼からすれば、政治状況を具体的・総合的に見据える力、つまり思慮を用いる必要がある。この点でも単純な民主政は欠点を持っている。

マキアヴェッリは、例えば、古代ローマの繁栄の理由を、神慮や運という説明方法に可能な限り依存せず、人為的見地から説明した。ギッチャルディーニに感銘を与えたのはこの世俗的説明であった。とはいえ、ギッチャルディーニに言わせれば、マキアヴェッリの方法論には、古代ローマが成功したからその政治を模倣すればフィレンツェも成功するという素朴さがあった。ギッチャルディーニからすれば、過度に一般化・法則化している点でも、マキアヴェッリの説明方法には思慮が足りていないのであった。

支配権を拡大するローマの共和国モデルを採らないということは、キリスト教の受け入れの問題と関わっている。マキアヴェッリは、ギッチャルディーニとは異なり、フィレンツェ共和国の存続・発展のためにキリスト教の中心的教義、すなわち、魂の救済を放棄する地点にまでその理論を徹底させた。古代をモデルとした共和国理論の徹底は、キリスト教を否定せざるをえないのである。ところが、ギッチャルディーニからすれば、そうした非キリスト教的な方策は現実的ではなかった。彼は、当時の読者にとってより妥当な方策を選んだのである。

##### (2) サヴォナローラとの思想的関係

マキアヴェッリは、すでに述べたように、サヴォナローラの思想や行動から強い影響を受けており、これは、フィレンツェ市民の多くがサヴォナローラを支持したことと深い関係がある。マキアヴェッリは、サヴォナローラがフィレンツェの自由を確保するためにはこの都市で民主政が適切だという点では意見を同じくしているが、共和国が終末論的役割を果たすという宗教的信念にはまったく共鳴しなかった。

むしろ、マキアヴェッリが影響を受けたのは、奇跡を示さずとも民衆を宗教的に導けるという事実だった。しかもマキアヴェッリにとって、有益な宗教とはキリスト教ではなかった。キリスト教が教える人間の目的は、現世の栄光や名誉ではなく、来世での救済である。マキアヴェッリに言わせるならば、この教義は、市民を弱体化させる。彼が目指すのは、天国行きを目指す宗教ではなく、国家の役に立つ宗教（市民宗教）であり、祖国のために勇敢に戦う市民を教育するような宗教である。古代ローマでは立法者ヌマが民に宗教心を植え付けた。フィレンツェにおけるローマの再生を目指すマキアヴェッリにとっては、軍事指導者と並んで重要な立法者、否、それ以上に重要な立法者は、いわば偽の預言者であった。彼は、現実的にはどの程度、そうした立法者の登場が可能だと考えたかどうかは不明だが、サヴォナローラ的な行為に期待をかけていたことは間違いない。さらにマキアヴェッリの理想を言えば、この立法者は武装していなければならないのである。

なお、この研究の過程で、マキアヴェッリの思想がサヴォナローラを経由した形でプラトン主義と関連しているという点を発見した。『君主論』と『ディスコルシ』の双方に立法者に関する議論は展開されており、マキアヴェッリの強い関心が立法者に向けられていることは間違いない。『君主論』第6章で示されているのは、超人的立法者のカテゴリーである。そこでは四人の「歴史的な」立法者が挙げられており、そのうちの一人はモーゼである。モーゼは偉大な預言者であり、かつ立法者として位置づけられている。当時の資料から明らかなのは、サヴォナローラ支持者の中に預言者サヴォナローラをプラトンの「哲人王」と同一視する理解があったことである。マキアヴェッリが『君主論』第6章でこうした宗教的立法者を提示したことは、当時のフィレンツェにおけるプラトン主義と高まりと無縁ではない。

一般的にはマキアヴェッリは、プラトンに批判的であったと理解されがちである。というのも、『君主論』第15章で、明らかにプラトンを念頭に置きながら、従来の政治理論を空想的・想像

的だと非難しているからである。とはいえ、マキアヴェッリは、哲人王というプラトン主義的なイメージを利用しており、超人的な立法者というカテゴリーを提示している点からすれば、マキアヴェッリも意図的であるかどうかは不明だが、プラトン主義の理念型的な像を継承しているのである。

また、本研究の遂行の過程で、より後の時代、つまり啓蒙時代の思想に対するマキアヴェッリの影響も視野に入れるようになった。申請者は、例えば、モンテスキューがマキアヴェッリの共和国理論に大きな影響を受け、しかもマキアヴェッリとは逆の方向、つまり支配権を拡大しない国家を目指すためのその理論を受け継いだことを明らかにした。さらに言えば、マキアヴェッリのルソーに対する影響力の大きさは計り知れない。今後の課題は、啓蒙時代の思想家に対するマキアヴェッリの知的インパクトを探ることである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

|  |                    |
|--|--------------------|
| 1. 著者名<br>鹿子生浩輝                                    | 4. 巻<br>66         |
| 2. 論文標題<br>ルネサンス共和主義からフランス啓蒙ヘーマキアヴェッリとモンテスキューの歴史解釈 | 5. 発行年<br>2022年    |
| 3. 雑誌名<br>関西大学法学研究所研究叢書                            | 6. 最初と最後の頁<br>1-31 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                      | 査読の有無<br>有         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難             | 国際共著<br>-          |

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

|                                      |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>鹿子生浩輝                     |
| 2. 発表標題<br>「立法者の暴力と嘘：政治的古典における理論と実践」 |
| 3. 学会等名<br>政治思想学会                    |
| 4. 発表年<br>2020年                      |

|                         |
|-------------------------|
| 1. 発表者名<br>鹿子生浩輝        |
| 2. 発表標題<br>プラトンとマキアヴェッリ |
| 3. 学会等名<br>新プラトン主義協会    |
| 4. 発表年<br>2019年         |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>鹿子生浩輝                               |
| 2. 発表標題<br>政治思想史における立法者 マキアヴェッリ・サヴォナローラ・プラトン主義 |
| 3. 学会等名<br>東北法学会                               |
| 4. 発表年<br>2019年                                |

|                                    |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>鹿子生浩輝                   |
| 2. 発表標題<br>立法者の暴力と嘘：政治的古典における理論と実践 |
| 3. 学会等名<br>政治思想学会                  |
| 4. 発表年<br>2020年                    |

〔図書〕 計2件

|                            |                 |
|----------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>野口 雅弘、山本 圭、高山 裕二 | 4. 発行年<br>2021年 |
| 2. 出版社<br>ミネルヴァ書房          | 5. 総ページ数<br>216 |
| 3. 書名<br>よくわかる政治思想         |                 |

|                  |                 |
|------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>鹿子生 浩輝 | 4. 発行年<br>2019年 |
| 2. 出版社<br>岩波書店   | 5. 総ページ数<br>270 |
| 3. 書名<br>マキアヴェッリ |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|